

05・恥ずかしい事を全部告白させられて、意地悪あまあま『負けセツクス』する

『04・えつちな事ばつか考えてるのがバレて、優しくいじめられて言葉攻め耳舐めされる』からそのまま続き。

とある年の夏。七月二十七日（月）二十二時近く。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夜。

場所は、民宿内、現在主人公が自室として使っている部屋。

主人公と弥映は今、隣り合つて座り、その距離はとても近い。

〈主人公〉

「その……。…………胸も……」

主人公は、先ほど弥映から『してほしい事を素直に打ち明けていい』と言われた。

だから『胸も触つてほしい』と言いたかったが、最後まで言えず、口ごもつてしまつている。

主人公、これではいけないと思う。

こちらから頼んでいるのに、具体的にどうしたらいいか言えていないのは、問題だと思う。

だが、弥映は主人公の言いたい事を察して話してくれる。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく、ゆつくり確認する】

おっぱいも弱いの？

『ひやあ』は感嘆の『ひやあ』

擦（こす）れると『ひやあ』ってなる？

【主人公が可愛くて笑ってしまう】

はは。さつきから何（なん）かもじもじしてたのってそれ？」※

……やっぱりすごく優しいのかもしれない。

実際問題、ずっと優しくしかされていないし……。

〈主人公〉

「……うん……」

主人公、弥映の声があまりにも優しくて、思わず甘えてしまいたくなる。自分らしくないと思いつつ、樂をしてしまいたくなる。だが、やはりそれはいけなかつた。

次の瞬間、弥映は優しい声のまま、急にひどく意地悪を言つてくる。

●左ささやき※マークのセリフまでささやく

「※マークまで、ゆつくりと、すごく優しく促す。

強制している感じにならないように】

※『甘やかしてもらえる』と思つた聞き手を、ドキつとさせるイメージでお願いします※
いいよ。触つたげるから自分で脱ぎな?
服めくつて、ブラもずらして。

『おっぱい触つて下さい』つてして?』※

〈主人公〉

「えつ……。あつ……あつ……」

主人公、あまりの恥ずかしさに、言葉を失う。

そんな主人公に追い打ちをかけるかのようにならぬに、弥映は続ける。

●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく促す。強制している感じにならないように」

ほら、脱いで?」※

〈主人公〉

「……つ。……無理……」

弥映、その言葉を受けて、中央に向き直つて、主人公の顔を見つめながらささやく。

●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく促す。強制している感じにならないように」

無理じやないよ? しなさい?」※

〈主人公〉

「……つ……」

主人公、弥映の要求に顔を熱くし、喉を震わせる。
まだ応じていないのに、羞恥心でおかしくなりそうになる。

……つまり、そういう事だ。

拒否するようなふりをしておいて、もはや自分には『そうする気』しかないのだ。

……やっぱりこの人は、とんでもなく意地悪だ。
でも、私はそれが嫌じやないし、拒否する気もないのだ。

今、誰かに『ここにいる一人のうち『セックスしたくてたまらない』のは、どちらでしょ
うか?』と聞いたら、きっと、誰に聞いても絶対に全員が私をさす。
暗い部屋の中でも、自分のこの荒い呼吸を聞けば、誰だつてわかる。

なんてみつともないんだろう。

私はこんなに、みつともない人間だったのか。

今負けた。返事をする前から、服を脱ぐ前から、もう結果が決まつた。

私は完全に負けた。弥映ちゃんじやなくて自分に負けた。

『どうしても今この人と初体験したい』という欲望に、私の全部が負けたと、もうはつきりわかつてしまつた。

だつて、早くあの手に触つてほしくて、もう他の事が考えられない……。

SE1 主人公が自分で服を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「素直な感想を述べている。

主人公位の年代の女性の裸を見るのが、非常に久しぶりなので
わ……乳首ちつちや。

【優しく】

可愛い。

【甘くからかう】

なのにもう勃起してんね

（主人公）

「…………ううう…………」

弥映、再び左耳にささやく。

●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【すごく優しく】

よくできました。自分で触つた事ある？」※

（主人公）

「…………う」

主人公、もはや負けを認めて素直に頷く。

たとえここで自分が黙っていたところで、弥映は何もしない。

弥映はたとえば『言えないなら、ここでやめてしまおうか？』などと言つて、主人公を
揺さぶる気さえない。

『そんな事を言わなくとも、絶対に主人公はそうする』そう確信しているのだ。

●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しくからかう。主人公のリアクションから、

『これは、一度や二度じゃなく、自分で触った事があるな』と確信している

そうだよね。

【ゆっくりと、わざと多めに言つてからかう。実際にはこうは思っていない。

『せいぜい、何回か触った事はあるだろう』程度に考へている】

毎日オナつてる変態ちやんだもんね?】

〈主人公〉

「なつ……♥」

主人公、図星を指されて声が震える。

せめて隠したかったのに、明らかにそれを認めるような声を出してしまった。

一度負けを認めると、もう全部だめだ。

どんどん気持ちがゆるんで……いやむしろ、自分のダメなところを全部この人に知つて
もらいたいという欲望さえ、湧き上がつてくる。

弥映、少し驚いて、主人公の顔を見ようと正面に向き直る。

●中央 至近距離

【優しく。内心は少し驚いている】

うん？

【優しくからかう。まさか、本当にそうしているとは思つてもいなかつたが、

『別に、そうでもおかしくないよ』という感じで】

適當言つただけだけど。

【少し間をあけてから。優しくからかう】

マジ？

（主人公）

「あうう……」

主人公、優しく弥映に続きを促されて、理性がはじける。

今度は答える義務なんてないのに、素直に頷いてしまった。

これまで自分は、いつも正しいと思う事をして生きてきた。

そんな自分は理性的で、眞面目な人間なんだと思つていた。

だけどその前提が、今、半分無事なまま、半分壊れた。

まず、自分はちつとも理性的でも眞面目でもない事が、今はつきりとよくわかつた。
……でも、これが正しい事『じやない』とは、思つていてない。

だからつまり、自分は今間違いを犯しているわけじやない。
少なくとも、これが今『自分が正しいと思う事』なのだ。

セツクスがしたくて、この人に自分の心を見てほしくて。

今まで誰にも言えないと思つていた事を、自分から全部バラす。
それが、今自分が一番したい事で、正しい選択なのだ。

しかも自分は、弥映がそれを受け入れてくれると思つていて。

今日出会つたばかりなのに、何の根拠もないのに、なぜかそう確信している。
早く全部自分を知つてもらつて、弱い所にいっぱい触つてほしいと願つていて。

ああ。知らなかつた。

自分の意志を持つて負けるのが、こんなに気持ちいいなんて知らなかつた……。

〈主人公〉

「あ。あ。あ。実は」

●中央 至近距離

「優しく。相槌を打つて、続きを促す。主人公が緊張しているのがわかる】

うん」

〈主人公〉

「あの本にあるみたいにつ。いつも自分で触つててつ。
でも全然本みたいになんなくてえ……♥」

●中央 至近距離

「優しく相槌を打つて、続きを促す】
うん」

〈主人公〉

「気持ちいい感じはするのに。

『びくーっ』ていうのが、どれだけ触つても来なくてえ
し。下、触つてもダメでっ。

いつも変な感じのまま寝るしかなくてつ。
それがすごい嫌でえつ……♥』

●中央　至近距離

「長めに間をあけてから。どう返事をしようか、少しだけ考えている。
それから、優しく相槌を打つ

そつか」

涙ながらに訴えると、弥映はとびきり優しい声で応えてくれる。
やつぱりこの人はずるい。

これをされると、主人公は全部話してしまいたくなる……。

弥映の顔が近づく。そのまま、額にキスされた。

●中央　至近距離

「優しく額にキスする。泣きじやくる主人公の緊張を解きたい」

ちゅ。

【すごく優しく。主人公が今言つた言葉をまとめる。

『びくーつ』つていうのは、つまり、『いく』事だろうと察する】

毎日触つてたのに、よくわからなかつたんだ。

触つてみて気持ちいい感じはしたけど、いつもいけなくて困つてたんだ?】

〈主人公〉

「はい……」

主人公、もう訳がわからなくなつて、ぐすぐす泣きながら頷く。

自慰経験の告白どころか、寝る前にいつも触つてている事まで話してしまつた……。

だけど主人公は、どんどん口が軽くなる自分を『信じられない』『こんなはずじやなかつた』と思いながら、それが快感になりつつある。

もう、弥映に全部知つてもらつて、甘やかしてもらいたいという欲望に、歯止めが利かないのだ。

●中央 至近距離

【ゆっくり、すごく優しくなだめる。

主人公はおそらく、例の作家の性描写を参考にしたのだろう。

だが、あの作家は詩的な表現を多用するあまり、具体性に欠ける事がある。
つまり、オナニー指南書としては不向きだろうと思つていて
そつか。大変だつたね。しんどかつたでしょ。

【少し間をあけてから。

※マークまでひときわ優しく、聞き手が

『全部ゆだねて甘えてしまいたい』と思つてしまふような感じで】

大丈夫だよ。ちゃんと教えてあげるから。

どういうのがいくつて事なのか、ちゃんと教えてたげるから。

【『後ろから抱きしめて、乳首いじりをしてあげる』という意味で言つていて】

後ろからぎゅつてして、してあげる】

●●左さきやき※マークのセリフまでさきやく

【すごく優しく】

あたしの足の間（あいだ）おいで】※

（主人公）

「うん……♥」

SE2　主人公が移動する音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

弥映、主人公を後ろから抱きしめる。

それから、右耳側から顔を出して、右耳に話しかける。

●右　至近距離

【主人公が、すっかり素直で従順になつたので可愛い。】

反面『この信頼を裏切れないな』とも思っている】

ふふ。

【少し間をあけてから。※マークまで優しく教えていく】

あのね。おっぱいはこうやつていじるんだよ。

指の腹（はら）を乳首の真ん中にのつけてさ。優しくくるくるするの】※

（主人公）

「ああ……つ♥」

●右 至近距離

「とても優しく。主人公の反応がとてもいいので嬉しい」
気持しいい？ 人差し指より、中指でくるくるが好き？」

〈主人公〉

「うん♥ 気持しいい……つ♥ 中指すき♥
自分でするのとつ♥ せんせんちがうつ♥
……はあ、はあ、はあ。ああつ……♥」

●右 至近距離

「とても優しく。主人公の反応がとてもいいので嬉しい。
というか、興奮してくる。

この、いかにも他人になかなか心を開かなさそうな主人公が、
自分のする事でこんなに感じて、甘えてくるのが可愛い
自分で触るのと全然違う？ よかつた。

【優しく意地悪を言う。】

【これはオナニー指南なのだから、触るところを見ていないとダメだよ】と言う感じで】

あ。ちゃんと触られるところ見てる？ 目を閉じてちやダメだよ」

「主人公」

「あ、あつ♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく
「少し間をあけてから。ゆっくりと」

ほら。どんな風にいじられてるか見て？

乳首さつきより硬くなつて、もつと勃起してるでしょ？」 ※

「主人公」

「うう……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、優しく、淡々と、言い聞かせるように意地悪を言う】
あんたの乳首ね。おっぱい出ないから。

今は、気持ちよくなるためだけにあるんだよ？

【少し間をあけてから。『きゅーっ』のところで乳首を軽くつまんでいるイメージ】

こうやつて『きゅー♥』つてひねつても』※

〈主人公〉

「あああつ……♥」

●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、優しく、淡々と、言い聞かせるように意地悪を言う】

お乳じやなくて、エロい声出ちやうもんね。

昨日まではオナニー用おっぱいだつたけど。

今日からは、あたしがいじつてあげるからね』※

弥映、主人公の耳元でくすくす嬉しそうに笑いながら、主人公の乳首をいじる。

●右 至近距離

★「【※15秒※ 右耳側でくすくす嬉しそうに笑い、たまに耳にキスする。

主人公の乳首をいじりながら、主人公の反応が可愛くて笑っているイメージ。

意地悪な感じではなく、愛おしそうに笑う。』☆☆

★ ふふ。ふふふふ。ふふふふふ……♥ ちゅ♥ ふふふ。ふふふつ……♥ ちゅ。ちゅ♥

●右 さきやき ※マークのセリフまでさきやく

「【そだ】は『そうだ』の略】

そだ。乳首、爪の先っぽでカリカリもしてみよつか。

【少し間をあけてから。カリカリしてから発言しているイメージ】
こんな風に。

【少し間をあけてから。優しくゆっくりと】
カリカリカリって。弱く、優しくね。

【『この子』は乳首の事をさして言っている】

色んなやり方で可愛い可愛いいつしたら、この子も喜んで。
もつと敏感になってくれるからね。

【ひとりわ優しくさきやく】

一杯気持ちよくなつていよいよ】※

〈主人公〉

「あ。あつ。あ。あつ……♥ んううつ……♥」

●右 至近距離

★「【※15秒※】再び右耳側でくすぐす嬉しそうに笑い、たまに耳にキスする。主人公の乳首をいじりながら、主人公の反応が可愛くて笑っているイメージ。意地悪な感じではなく、愛おしそうに笑う】★★

★ふふふ。あはつ♥ ふふふふ。ふふふふふ……♥ ちゅ♥ ふふふ。ふふふつ……♥ ちゅ。ちゅ♥

【興奮してくる。ゆっくり三回呼吸する】

はあ。はあ……はあ……。

【興奮して、思わず甘いため息をつく】

はあ……。

【甘くからかう】

すつごいこりこりになつてんね♥

【『しゅき』は『好き』の意味。主人公が可愛くて、思わず赤ちゃん言葉になる】

乳首、そんなしゅきか。ふふふ♥】

〈主人公〉

「……好き。好き。好きです。もつとして下さいつ……♥」

●右 至近距離

「少し間をあけてから優しく。少し呼吸が荒くなつてくる。

主人公の反応がすごく可愛いので、内心かなり興奮している。

だが、主人公を怖がらせないように、興奮を抑えようとする。『ここ』は乳首の事】
うんうん♥ はあ……はあ。硬くなつたここ。

今度はこうやつて、指、五本ずつ全部使つて包んで、こねこねするから。

【すごく優しくからかう】

ちゃんと気持ちよくななるんだぞ？

【ゆつくり、乳首をこねるのに合わせて言う】

こね、こね。こね、こね♥ こね、こね。こね、こね♥

【ものすごく興奮して。ゆつくり三回呼吸する】

はあ……はあ……はあ……。

【小さく、すごく嬉しそうに笑う】

ふふ……ふふ……ふふ♥】

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【すごく優しく。でも、だんだん気安くなつてくる】

もお。ほんとに乳首大好きさんだな。完全に力抜けちゃつてるね。
これでいけないので、辛かつたでしょ】※

●右 至近距離
〔耳にキスする〕

ん♥」

弥映、主人公の唇にキスしようと、頭を動かす。
主人公もそれを察して、顔を寄せる。

●中央 至近距離

☆「〔※10秒※ キスする。わざと音を立てるような、いやらしいキス〕 ☆

★ ちゅ……♥ ちゅつ。ちゅつ。ちゅばつ♥ ちゅばあつ……ちゅ♥

〔ものすごく興奮して、ゆっくり二回呼吸する〕

はあ……はあ。

〔興奮を抑えようと、微笑む〕

ふふ」

弥映、主人公を至近距離で見つめたまま話す。
位置は中央のまま。

●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ものすごく優しく。主人公が可愛くて仕方ない」

エロい彼女って良（い）いね。なんでもしてあげたくなる。

【ここから※マークまで、

ゆっくりと、とても言葉攻めしているとは思えないような、優しい口調で。

本当にそうする気しかないようなイメージで】

こんなの、毎日徹底的にいじめるしかないじやん。

これから一杯。暇さえあれば乳首いじりしてあげるね。

だからあんたは一日何回も乳首イキして。

乳首いじめてもらえないと生きていけなくなつてもいいんだよ。

ね？」※

〈主人公〉

「……♥」

主人公その言葉に安心してしまつて、全て委ねてしまいたくなる。すると意志に判して、無意識に腰が逃げそうになる。

●中央　至近距離

「優しく。主人公がもぞもぞ動こうとするので
んー？」

【優しくからかう】

ほら腰逃げない♥　くいくいされたいんでしょ?】

〈主人公〉

「あの……♥　お股、がつ……♥」

だけど、それはすぐに捕まえられた。

主人公、目に涙を浮かべながら、弥映を見上げて懇願する。

さつきから、身体の中心が熱くてたまらない。

触る以外の方法で熱いのを何とかしようとすると、どうしても身体がもぞもぞしてしま
うのだ。

それをきっと『腰が逃げる』というのだろう……。

●中央　至近距離

「〔優しく続きを促す〕

んー？」

〈主人公〉

「お股が熱いんです……♥ して？ して下さいつ……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく
〔甘くからかう〕

お股もぞもぞすんの？

〔少し間をあけてから。わざとらしく、なぜそうなるのか、わかつていなフリをする〕

えー？ なんでだろ。身体（からだ）変になつちやつたの？

〔少し間をあけてから。わざとらしく。でも優しく。〕

主人公に、どうしてほしいのか、全部言わせようとしている

あたしきあ。今日があんたと初えつちだからさ。

〔して？〕だけじや、どうしたらしいのかわかんないんだ？

〔ゆっくりと、とても言葉攻めしているとは思えないような、優しい口調で〕

だから教えて？ あんたの好きなのしてあげたいの。どうして欲しいか教えて？」※

主人公、ここまで言わされるのか。ここまで恥ずかしい事をさせられるのか。と、愕然としながら、それが快感でたまらない。

自分は恥ずかしい事をされたい。

恥ずかしい姿をさらして、弥映にたっぷり甘えたい。

だって、ちゃんとどうしてほしいか言いさえすれば、弥映はきつと全部してくれ。意地悪だけど優しいのだ。

察して先回りはしてくれない代わりに、主人公が直接お願いした事は、みんな聞いてくれる。

つまりそれは……ただの受け身じゃなくて、この行為に自分から参加しろという事なのだ。

（主人公）

「触つて、欲しい……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく甘つたるく、優しく尋ねる。主人公が自分から言つたのが嬉しい】

うん♥ どこ触つて欲しい？」※

（主人公）

「えつとつ……♥」

●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【すごく甘つたるく尋ねる。『ゆつて』は『言つて』の意味】

ほらゆつて♥ ちやんと♥」※

主人公、弥映の声が優しくて、うつとりと夢見心地になっていく。
それから、これが自分の本性なのだと理解する。

年齢の割に自立した女性のふりをしながら、本当は甘えたくてたまらない。
普段なら嫌惡する、媚びた甘い声を出して、必死におねだりをして。

それを優しく受け入れられたくてたまらない。いや、受け入れられると信じている。
——それが、自分という人間なのだと。

だけど、こんな事は他の人の前ではできない。

今日出会つたばかりの人なのに、弥映の前でしかできない。
それはつまり『弥映が好きだ』という事なのだと、はつきりわかつてしまつた。

（主人公）

「ばんつの中手入れで♥ 私の♥ クリトリス♥ 触つてほしいです♥
弥映ちゃんの手で♥ 初めてのクリイキしたいです……♥」

●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく
「嬉しくて笑う。素直にねだる主人公が可愛くてしようがない」
ふふふふ……♥

【すぐ甘つたるく、主人公の言つた事を復唱する】
クリいじつてほしいの？ いいよ♥
じやあ脱ぎ脱ぎしないとね♥】※

SE3 弥映が主人公の服を脱がす音
【最初から最後まで流す】

すると、主人公が脱ごうとするまでもなく、弥映の手でパジヤマが脱がされていく。
また自分で脱がなくてはならないと思つていたから、主人公はホツとしたような、より
恥ずかしいような気分で、より激しく興奮していく。

さつきは自分の意志で堕ちていくのがたまらなかつたのに、今度はされるがままになるのが気持ちいい。

まるで脳に『ちゃんとおねだりできたら、どろどろに濡れて気持ち悪くなつた服を、映の手で脱がしてもらえる』と、刷り込まれていくようだ……。

●右 至近距離

「少し驚いて。甘くからかう」

うわ。ぐちよぐちよ。着てた服ごとどろどろだ。

【右耳にキスする】
ちゅ

●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【甘くからかう】

匂いすごいよ？ これ、明日伯母さん達にバレないよう洗うの大変だね♥」 ※

（主人公）

「うう……♥」

こうして主人公はパジャマのズボンを脱がされ、下半身裸になる。

上半身はブラをずらされて胸をさらしているから、これが、今まで生きてきて一番恥ずかしい格好だ。

こんなもの、できれば誰にも見られたくない。

そう思うような格好なのに、自分はもう例外を作つてしまつた。

さらに、その例外に對しては『見てほしい』とすら思つている……。

●右 至近距離

「すごく甘つたるく笑う。主人公が可愛くてしようがない】

くふふふふ♥

〔右耳にキスする〕

ちゅ♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

〔優しく〕

大丈夫。ちゃんと手伝つてあげるから。

〔少し間をあけてから。実感を込めて。本当にすごく嬉しい〕
濡れてくれるのって、なんか嬉しいね。

【照れ隠しに、甘くからかう。

『ぐちゅぐちゅんなつて』は『ぐちゅぐちゅになつて』の意味
ちゃんとぐちゅぐちゅんなつて、えつちの準備できて、偉いぞ』※

〈主人公〉

「あ、の……♥」

●右 至近距離

「すごく優しく
んー？」

〈主人公〉

「キスしたい……♥ キスしながらしたい……♥」

その時、弥映が少し驚いたような顔をした。

主人公としては、決しておかしな願望ではないと思ったが、彼女にとつては意外であつたようだ。

だけど、弥映は拒絶しない。甘い声でたずねてくる。

●右　至近距離

「少し驚くが、あくまで甘い声で話し続ける。
そんな『恋人らしい』お願ひをされるとは思つていなかつた』
キスしたいの？　キス好き？」

〈主人公〉

「うん。好き……♥　弥映ちゃんとキスしたい♥　ちゅーしながらしたい……♥」

●右　至近距離

「驚きのあまり、少し間をあけてから。
すごく嬉しい。」

変わらず甘い声を作つて話すが、内心、かなり胸がきゅーんとなつていて
あたしも好き……。うん。いいよ。ちゅーしながらクリいじりしよ♥」

SE4 弥映が主人公の身体を自分の足で固定する音
【最初から最後まで流す】

●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく」

こうやつて足絡めて。動けないようにしてたげるから。思う存分初クリイキしていいよ

※

弥映、そう言うと、主人公の股間に右手を伸ばし、濡れそぼったそこに直接触れていく。

弥映の手が軽く『そこ』を押しただけで、主人公はびくつと反応してしまった。

〈主人公〉

「……あつ……♥」

SE5 弥映が主人公の股間に触れる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

●右 至近距離

「すごく嬉しい。」

うわ。熱……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく
「〔優しく〕

大丈夫だよ。これから沢山気持ちよくなれるからね。
「〔優しくゆっくりと。クリトリスの皮を、優しくむく〕
こうやつて。皮から出してあげて。ほら♥」※

〈主人公〉

「……あああっ……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく
「〔※マークまでひとりわ優しく、ゆっくりと〕

一杯出でるとろとろつけて、優しく擦（こす）つてあげようね。
〔少し間をあけてから優しく〕

大丈夫。めっちゃ勃起してるから。今日はイけるよ。あたしがついてるからね♥」※

SE6 主人公の股間の水音1
〔最初から最後まで流す〕

【繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

弥映、約束通りキスしようと、顔を寄せる。

声が中央に移動する。

●中央　至近距離

「優しく一回だけキスする

ちゅ♥」

●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【※マークまでひときわ優しく、ゆっくりと】

こつちの手繋いで。一杯ちゅーしながら気持ちよくなろうね」※

●中央　至近距離

★「【※15秒※　キスする。震える主人公の緊張をほぐしてあげるような甘いキス。

軽くて、水気の多い、ちゅぱつとしたキスを繰り返す】★★

★　ちゅつ。くちゅつ。ちゅ♥　ちゅつ。ちゅ♥　くちゅ。ぶちゅつ♥　ちゅ……ちゅつ♥」

● 中央 さきやき ※マークのセリフまでさきやく

「【※マークまでキスしながら話す。ひときわ優しく、ゆつくりと】

気持ちいい？ 今までと違う感じする？

【優しく一回だけキスする】

ちゅ。

大丈夫。痛くしないよ。強くさすつたら、クリびつくりしちやうからね。

【優しく一回だけキスする】

ちゅ。

優しくゆつくりやろ」 ※

（主人公）

「………つ
♥」

主人公、弥映に手を握られ、足は絡められて、うつとりと快感に溺れる。

弥映に触れられている身体の芯がすごく熱くて、他の事は考えられない。

汗がしたたり落ちて、目に入りそうなのに、空いている手で拭う気にもならない。

ただ、もつと気持ちよくなりたい。もつと擦つて、甘い刺激を与えてほしい……。

●中央 至近距離

「興奮して甘い息を漏らす。三回、ゆっくり呼吸する」
はあ……はあ……はあ……。

【甘くからかう】

ふふ。今度は腰動いてる。やらしー♥ ほんとに処女?』

〈主人公〉

「あ……つ♥」

●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまでひときわ優しく、ゆっくりと」

大丈夫だよ。エロい恋人つて可愛いねって言つたじやん。

【優しく一回だけキスする】

ちゅ。

【からかつて いる よう で 優しく】

てか、エロい方が嬉しい。あたしの手で感じてくれるの、幸せだよ』※

（主人公）

「…………♥」

主人公、弥映の言葉にすっかり甘えたくなつてしまつて、夢中で腰を動かす。

弥映に軽く圧迫するようないじつてもらひながら、好きな所を自分から擦り付けに行くのが、たまらなく気持ちいい。

どういう事が『いく』なのかわからないが……。
ずっとこれをしていたい位、気持ちいい。

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「さらに興奮して甘く、荒い息を漏らす。

さつきよりも余裕がない。三回、ゆっくり呼吸する

ふう……はあ……はあ。

【※マークまで興奮して、普通に話そうとしてもささやき声っぽくなる。

押し付けてくるのを『もつと強くしてほしい』の意味だと思つている
どれどれ。もうちょっと強く？ いいよ】※

ここでSE6が止まる。

SE7　主人公の股間の水音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「優しく一回だけキスする」

ちゅ。

ふふふふ……♥　どうしたら気持ちいいか、わかつってきたね。

【優しく確認する。『この強さがいいようだ』と理解している】

この強さでずっと擦（こす）る？　ずっとこのままがいい位（くらい）気持ちいい？

※

〈主人公〉

「このまま♥　このままの強さで、してほしいっ……♥」

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「〔優しく一回だけキスする〕

ちゅ。

〔※マークまで興奮して、普通に話そうとしてもささやき声っぽくなる。〕
わかつたよ。このまましてあげるから、好きな時にイッていいよ」※

●中央 至近距離

☆「〔※10秒※ キスする。先ほど同様、主人公に寄り添うような甘いキス。
ただし、今度は舌を絡める。〕

軽くて、水気の多い、ちゅぱっとしたキスを繰り返す】☆

★ れろつ……はむ♥ れろれろ……れろ♥ ちゅ♥ えれれ♥ ちゅ♥ れろつ♥

（主人公）

「……！ ……弥映ちや♥ あの♥ あのあの♥ あの……♥」

そうしているうちに、だんだん変化が訪れてきた。

思わず、背伸びをするように、びくつと背筋が跳ねる。

さすつてもらえるのが気持ちいいのに、このまでいたいのに。
何か苦しいような、切ないような……奇妙な感覚がある。

これは、一体何なのだろう。

さつきからこれに襲われるせいで、主人公はさつきよりもさらに、もつと強くさすってほしくて、とにかく身体が熱いのだ。

主人公、荒い呼吸で、助けを求めるように弥映を見上げる。

〈主人公〉

「はーっ♥　はーっ♥　はーっ……♥」

●●中央　さきやき　※マークのセリフまでさきやく

「すごく優しく。

『なんか来ちやいそう?』は『イきそな感じがする?』という意味で言っている

ふふ。なんか来ちやいそう?

クリ、もつと熱くなつてる感じする?

〔ひときわ優しく〕

もうちよつとでイけるよ。偉いね♥」※

●中央　至近距離

★「【※10秒※ キスする。先ほど同様、主人公に寄り添うような甘いキス。」

★ んむ♥ んつ……れろれろ……♥ ちゅ♥ ちゅぱちゅぱ……♥ ちゅ♥ ちゅ♥

● 中央 さきやき ※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、興奮して少し早口になる。

優しくしようとはしているが、少し余裕がない】

いいよ。いつでもイつて。

大丈夫。いくとこ見せて？ 見たい。

大丈夫だよ。大丈夫」※

ここで、SE8のテンポが少し早くなる。

そうか、これが『イキそう』という事なのか。

わからないけど、わかった気がする……。

主人公、そう思いながら、弥映に身をゆだねる。

……自分がよくわからなくとも、きっと弥映が助けてくれるだろう。

そう思うと、とても安心する。

汗をかいたせいで、いつの間にか自分の匂いと弥映の匂いが混じっていて、それがすぐ心地いい。

『どうされているか見ていろ』と言われたのに、無意識のうちに目を閉じてしまう。でも、きっと弥映は許してくれるだろう。

初めての相手が弥映でよかつたと、素直に思つた。

（主人公）

「……弥映ちゃん……♥　弥映ちゃん♥」

二人、キスしながら、しつかり身体を絡める。

粘膜と指が触れて、かすかに聞こえる、漏れるような水音と、小さく抑えたような喘ぎ声だけが聞こえる。

●中央　至近距離

★「〔※10秒※　キスする。先ほど同様、主人公に寄り添うような甘いキス。」

先ほどよりもさらに一段階、舌を絡めた濃いキス】★

★ んーんつ♥ ん♥ ふ♥ れろろつ……ん♥ ちゅるつ……ちゅ♥ ちゅ♥ ちゅ♥ ちゅ♥

【少し苦しそうにキスする】

※主人公がイキそうなのを、聞き手に悟らせるイメージ※

んつ♥ んんう♥ んつ♥』

〈主人公〉

「んんう……！ ふつ♥ ……んーつ♥ んうつ……♥」

● 中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【興奮して少し早口になる。優しくしようとはしているが、少し余裕がない。】

主人公がもういく事を理解する

いいよ。イキな。イツちやえ』※

● 中央 至近距離

「キスして再び主人公の唇をふさぐ

ちゅ。

【苦しそうにキスする】

※さつきよりも一段階苦しそうにして、

主人公がイキそうなのを、聞き手に悟らせるイメージ※

んつ！ んん…… ♡ ん ♡ んーつ…… ♡

【ここで主人公がいく。】

キスしながら、自分もびくつとする】

※聞き手に、ここがピークポイントだとわかりやすく説明するイメージ※

んつ……！

ここでSE7が止まる。

●中央 至近距離

「一瞬間をあけてから。

荒く、甘い呼吸を六回する。かなり早く、すごく興奮している】

はーつ、はーつ。はーつ、はーつ。はーつ、はーつ…… ♡

【優しく笑う。主人公を安心させたい。それからキスする】

ふふ……ちゅ♥

できたね♥

【甘くからかう。】

先ほどの主人公のセリフを受けて。『びくーつとなる』は『いく』と言う意味】

『びくーつ』てなれたじやん♥』

〈主人公〉

「……あ。あ。これ、イ。イ……？」

主人公、呆然とした心地で、弥映にもたれかかる。

一瞬、頭が真っ白になるほどの快感が訪れて、全身がびくつと伸びて。

次の瞬間、だらりと弛緩したかと思つたら、さつきの快感が薄く延ばされるように広がつてきて……。

今はその快感に、全身がじんわりと包まれているような気分だ。

すごく気持ちがよくて……なんだか、瞼が重い。目がとろんとする。

動くどころか、瞬きをするだけで、大変な労働のような気がしてくる。

そんな主人公に、弥映は再び主人公の右耳側に頭を戻してささやく。

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『これがいくつて事?』と聞いていると理解して。

※マークまで、優しく、丁寧に説明する。

『ぽかぽかんなつて』は『ぽかぽかになつて』の意味】

そうだよ。

これが、いくつて事。

一回びくつてなつた後（あと）、身体（からだ）ふわーつてして、ぽかぽかんなつて、眠たくなる事】※

●右 至近距離

【優しく促す。

この時は『主人公が眠つてしまつたら、自分の部屋に戻ろう』と思つてゐる
このまま寝ちやいな。寝るまで、ずっとなでなでしてゐるから】

（主人公）

「……うん……」

主人公、振り向いて、弥映に勧められるまま、正面から弥映にしがみつく。
優しくぎゅっと抱きしめられて、快感も相まって夢見心地だ。

【最初から最後まで流す】

SE9 弥映が主人公の背中を優しくとんとんする音

【最初から最後まで流す】

【次のセリフと重ねて流す】

●中央 至近距離

「優しく耳にキスする

ちゅ。

【すこく優しく】

いい子、いい子。初イキできて偉いね♥

主人公、思う。

……そうか、これが『いく』って事なのか。

弥映ちゃんの言う通り、身体がふわふわして、でも重いような気もして、自由が利かな
くて。このまま眠ってしまいたくなるような感覚だ。

……あれ。

そういえば……。

〈主人公〉

「……あの」

●中央 至近距離

「優しく。内心きよとんとして

んー？」

〈主人公〉

「……なんか、イ。く時。足が、びーんってなつたような

●中央 至近距離

「声が笑っている。主人公が妙な事を話し出すので。

『こういう内容の事を伝えたいの?』という感じで
いく時、足ピンつてなつた?」

〈主人公〉

「……ような、気がするし」

●中央　至近距離

【相槌を打つて、続きを促す】

うん

〈主人公〉

「ならなかつたような気もする……」

●中央　至近距離

【声が笑っている。少し混乱して。】

足がピンと『なつた』のか『なつてない』のかわからないので
なんなかつた？

〈主人公〉

「もう覚えてない……。

なるつて聞いてたから、実際どうなのか知りたかったのに……」

●中央　至近距離

「くすくす笑いながら優しく。

主人公が眠くなっている事を察して、可愛くてたまらない。

眠いから、よくわからない事を言っているのだろうと考える】

どつちよ。

【私は、イツても足はピーンと伸びない】という意味で言っている
あたしなんないんだよね。

【どちらかというと、背中をぐーっとそらしている事が多い】という意味で言っている
なんかね、背中とかのが、ぐーってなる。

【優しく。『もう寝なさい』と言うように】

だからさ、どういう風になつても変じやないよ。大丈夫】

弥映、主人公を寝かせようと、主人公の布団までいって、布団をめくる。

SE10 弥映が布団をめくる音

【最初から最後まで流す】

【少しだけ遠くで聞こえる】

距離が少し離れる。

SE11 弥映が布団を『ぽん、ぽん』と叩く音
【最初から最後まで流す】
【少しだけ遠くで聞こえる】

弥映、主人公に布団に入るよう促す。

●中央

【優しく促すように】

ほら。おいで。疲れたでしょ。今日は頑張ったね】

主人公は、素直に従つて、布団に入る。

確かに疲れた。

身体は温かくて気持ちよく、体調はむしろいい位だが、とにかくけだるい。何もしたくない。

たとえば汗をかいたが、何か飲むのもおつくうだ。

後で水分不足で困るかも知れないが、今はとにかく横になりたい。
そのまま、目を閉じたい。
でも……。

SE12　主人公が布団に入る音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「あの」

●中央

〔優しくなだめるような声で〕

「んー？」

……確かめて、おかなくてはならない事がある。

〈主人公〉

「絶対いてね？　朝になつても、いてね？」

……恋人、なんだから。一緒に寝るよね？」

SE13　主人公が弥映の手を握る音
【最初から最後まで流す】

●中央

「内心、とても驚くが、嬉しい。
『まるで本物の恋人のようだ。いや、主人公は本当にそう扱ってくれているのだ』と思う
あ……』

主人公が手を握ると、弥映が驚いた表情になる。
当たり前だ。

弥映は『恋人になろう』という約束が、セックスが終わつた後も続くとは、本気で思つ
てはいなかつたのだろう。

相手の言葉を真に受けない。それが、大人らしい対処法なのかもしれない。
だが、主人公にとつては、そうではない。

自分はこれからも……少なくとも、明日も一緒にいるつもりで、弥映にああ言つたのだ。

● 中央

「何と答えるべきか、迷っている。主人公が眠つたら、出ていくつもりだったからである。結果、言葉にならない声だけが出て、少し沈黙が続く」

……つ。

【※マークまで、優しくなだめるような声で。内心、すごく嬉しい】

うん、うん。

わかった。いるよ。

朝になつても、ちゃんとここにいる。ここで寝るし、ここで起きるから】※

〈主人公〉

「……そうだよ？」

恋人同士は、一緒に寝るし。一緒に『おはよう』つてするものなの。
あの本にも、そう書いてあつたでしょ？」

その時、弥映が目を細めて笑つた。

先ほどの少女のような笑い方とは違う、大人の表情だ。
その顔に、主人公の胸は締め付けられる。

やはり弥映は、自分達の事を、本気で恋人同士だとは思つていなかつたのだ。

でも……。

●中央

「ぼそっと。恋人扱いされているのが意外だし、恥ずかしい。でも、嬉しい」

……そうだよね。恋人同士は、一緒に寝るし、一緒に『おはよう』ってするよね。

【照れ笑いして】

なんか今、明日が楽しみかもって思つた……。

【心からお礼を言う】

ありがとう。

【額にキスする】

ちゅ

でも、弥映は拒絶しなかった。

主人公の手を握りしめたまま、切なげな表情を浮かべている。

それから……ややあつて、優しく微笑んだ。

●中央

「【※マークまで、すごく幸せそうに】

いいよ。手、繫いで寝よう。

【少し間をあけてから】

おやすみ。

【少し間をあけてから】

ふふ。

【嬉しくなつて、思わず、主人公の匂いをかぐ】

……すんすん。

【主人公の匂いが心地いい】

いい匂い……』※

弥映の顔が、今日何度目かわからない位、すぐそばに近づく。

すると、ふわりと弥映のシャンプーなのか、香水なのか。

とにかくいい匂いがして、主人公は、弥映の方こそ、よっぽどすてきな匂いだと思う。

——数時間前に出会った女性と付き合う事になつて、その日のうちにセックスする。

これは、あまりにもファイクションめいた話だ。

いわゆる『陽キヤ』の人達にとつては違うのかもしれないが、少なくとも、主人公にとつては、物語の中でしか聞いた事のない話だ。

たとえ主人公が『これは真剣な恋だ』と言つても、誰も信じないだろう。そんな気がしてしまった。

それでも主人公は『自分達は付き合つてゐる』と胸を張りたかつた。それから、今はとにかく、弥映と一緒にいたい。離れてはならないと思つた。なぜなら——……。

その答えを導き出す前に、主人公は眠りに落ちていく。

ここでフェードアウトして終了。